Topics Ⅰ 東北

# 米百俵の精神を中心市街地に ―複合再開発による新たな機能導入（新潟県長岡市）―

樋口 秀　長岡技術科学大学大学院

今から150年程前の慶応４年（1868），北越戊辰戦争に敗れた長岡のまちは廃墟と化しました。明治２年（1869），長岡藩の大参事・文武総督に任命された小林虎三郎は，優れた人材の育成こそが長岡のまちの立て直しに必要だと考え，国漢学校の建設を唱えましたがその財源はありませんでした。困窮する長岡藩に，支藩の三根山藩からお見舞いとして百俵の米が届きましたが，これを日々の生活に苦しむ藩士に配分するのではなく，子どもたちの未来を築くために，今は苦しみに耐えて学校を作ろうと熱く訴えた小林の熱意に藩士たちは納得し，売却して将来を担う人材育成のための学校建設資金に充てたというのが米百俵の故事です。国漢学校は明治３年（1970）に建設され，多くの人材を輩出しました。この国漢学校の跡地に閉店した百貨店がありましたが，この場所を含めて複合再開発が動き始めました。

旧百貨店の向かいに位置していた北越銀行本店とその駐車場敷地とが再開発事業に加わり，３棟の再開発ビル『米百俵プレイス（仮称）』が計画されています。中心となる米百俵棟（25,000㎡）は学びとにぎわいがテーマで，米百俵らいぶらりー（仮称）が人材育成を，低層階の屋内広場と店舗がにぎわいを担います。上層階には銀行が移り，旧銀行の建物はリノベーションされて産業ビジネス棟（12,000㎡）に生まれ変わります。平面駐車場だった場所は，店舗と立体駐車場（にぎわい棟：10,000㎡）になり，これらの３棟は２階で連結されます（2024年の完成予定）。

中心市街地に求められる機能が，単純な商業機能中心から人々の交流へと変化してきています。これまで，長岡市では市役所の中心市街地回帰が話題となった「アオーレ長岡」をはじめ，学びの拠点である「まちなかキャンパス」や「子育ての駅-ちびっ子広場」，福祉の拠点「ながおか町口御門」が大手通りの軸線約600m上に整備され，JR長岡駅とは屋根付きのペデストリアンデッキでつながりました。「新しいまちなかの価値創造」を目指した第２期中心市街地活性化基本計画（2014.4）が動き出しています。北越銀行は，小林虎三郎とともに長岡の復興に尽力した三島億二郎が設立した第六十九銀行でもあります。市民から集めたお金で，新しい産業を興すことが目的でした。長岡の中心市街地に新たな機能が加わり，地域や日本の将来を担う人材と，新しい地域産業の育成が始まろうとしています。

出典：長岡市中心市街地整備室提供資料（一部改変）　2017.5.29